

# 現代日本語のカナ文字の字形に関する小考

内山和也  
(別府大学)

## 0. はじめに

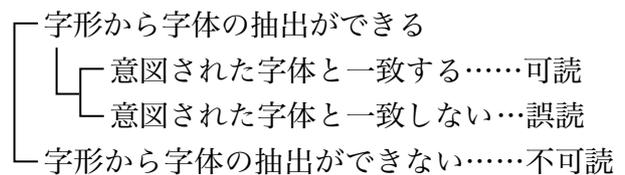
漢字とカナ文字を交用する現行の標準的な日本語表記(表記体系)は、文字体系間の使い分けが規範化されていないだけでなく、個々の文字体系自体が複雑だという問題を抱えている。殊に漢字の習得が非漢字系日本語学習者に大きな負担となっていることは周知であろう。いったい、漢字は日本語の表記体系において必須の要素でない<sup>1)</sup>のであるから、日本語の表記上の問題はカナ文字専用の正書法(ひらがなとカタカナの交用)を確立することで大きく改善されると考えることができる(内山 2013, 2015)。一方、日本語学習者が筆記したひらがなとカタカナの字形に様々な問題が生じるとする報告もある(小林 1980、中村 1999、内山 2015, 2016など)。この背景には、日本語教育のクラスで漢字の指導が優先されがちだというだけでなく、文法や語法が表記よりも重要だと見做されている実情がある(中村1999)ことが指摘できる。したがって、カナ文字の字形は、現行の漢字カナ交じり文を用いる場合だけでなく、漢字を廃してカナ文字専用の表記(正書法)を行なおうとする際にも問題となりうるものと考えられる。

本稿では、上記の問題を踏まえ、日本語教育での文字・表記指導の観点から、現代日本語のカナ文字の字形について考察するものである。

## 1. カナ文字における字形の逸脱

日本語学習者が筆記するカナ文字では、しばしば「字形の逸脱」が見られる。ここでいう「逸脱」とは、標準的な字形(字体の表示に用いられる字形)<sup>2)</sup>に対してストローク(筆画)が変形されていることをいう。

内山(2016)にしたがえば、文字の可読/不可読<sup>3)</sup>は以下のように整理できる。



なお、誤読や不可読の要因としては、(1)悪筆・(2)達筆・(3)誤字が考えられるとしている。また、誤字(書き誤り)による不可読文字は、それが一回的であれば書き損じ、反復的であれば誤用(嘘字)と見ることができる(内山 2015)。

字形の逸脱は、文字の読み取りに際し、誤読と不可読の基因となりうるものと考えられる。字形の逸脱によって(書き手の)意図しない字体が抽出されたときには誤読となり、そもそも字体の抽出ができなければ(あるいは、非常に困難であれば)不可読となる。一方、(字形ではなく)字体に起因する誤読や不可読もありうる。最初から書き手が字体を誤って認識しており、その誤った字体が実際に存在すれば誤読となり、存在しなければ不可読となる。しかし、複数の字形にわたって認められる共通の特徴によって構成されたものが字体であるかぎり、字体に起因する問題と字形に起因する問題とを実際に区別することは容易でない。本稿では、字体の問題と字形の問題とを峻別しようとするのではなく、主に字形の逸脱におけるトレランス tolerance(許容度)を検討したい。

### 1.1. 字形の損傷

書写書道教育の分野では、『字形の損傷』について論じられることがある。字形の損傷とは、杳名・杉崎(2013:169)によれば「文字の望ましい形(字形)に対して、許容の幅を超えること」をいうものである。したがって、字形の損傷は、字形の逸脱が可読の範囲にあり、かつ、一定を超えた場合の現象ということが出来る。では、

どの範囲を上下の閾にして、字形が損傷しているというであろうか。

まず、望ましい字形と比較できるとするかぎり、字形の逸脱が可読の範囲を超えてはならない。また、望ましい字形に対してはつきり認識できる程度には字形の逸脱がなければならない。つまり、〈標準的な読み手〉が違和感を感じる範囲の逸脱が損傷だということになるであろう。字形の損傷の範囲を知ろうとすれば、たとえば、字形を連続的に変化させ、どこから読み手が違和感を感じるかを実験する（反応を平均して規格化する）ことができると考えられる。

## 1.2. 字形の損傷の評価

「字形の損傷」に対する評価は二様であろう。まず、それをできるだけ避けるべきものという考えがありうる。字面の違和感、文やテキストの可読性<sup>4)</sup>を損ねると思われるからである。一方、字形の損傷では、字形の逸脱が可読の範囲に留まるため、審美的な視点を容れなければ問題にならないという考えもありうる。

筆者は前者の立場を支持したいと思うが、標準的なライティングスペース（書字空間）の変遷も考慮すべきである。言うまでもなく、電子テキストの普及によって、手で書くことの役割は相対的に逡減している。それ以外の方法で言語が有効に表記できるのであれば、手書き文字の字形の損傷はさまで気にすべきでないといえる。ただ、手で文字を書く経験がただちに消失するわけではないことも考えておかねばならない。

## 1.3. 手書き文字とデジタルフォント

手で文字を書くことと電子テキスト<sup>5)</sup>とが併行するのであれば、手書き文字（筆記体）とデジタルフォントとの字形の乖離が生じうる。Webページやスマートフォンの表示など、私たちが電子テキストに慣れるほど、デジタルフォントと乖離した手書き文字では可読性が損なわれることになるだろう。

「常用漢字表」において、「明朝体と筆写の楷書」との字形の差異は、「それぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきもの」とされている。

また、さらに詳細な解説として、手書き文字と印刷文字（デジタルフォントを含む）の字形に関する指針が報告されており、漢字の字形の細部には拘泥せず、手書き文字と印刷文字の字形の対応関係をできるだけ整理することが基本とされている（文化審議会国語分科会 2016）。これらは、漢字の字形に関するものだが、カナ文字についてはどうであろうか。

カナ文字においても手書き文字とデジタルフォントに字形の差異が見られる。たとえば、ひらがなの「そ」「ふ」「り」「さ」「き」などである。しかし、これらの字形の差異は字体に及んでいるといえる。これらでは、手書き文字でもそれぞれ複数の字体が用いられており<sup>6)</sup>、異体（字）の関係にあると考えるべきである。それに対して、字形のレベルでの差異が大きくなっているのが、「あ」「め」「わ」「ろ」などの文字である。小竹（2004）、杉崎・杳名（2009）、杳名（2010）、杳名・杉崎（2013）は、これらの左下に向けて払うべき終筆部分の損傷を問題にしている。ここでは字形の損傷がカナ文字の横書きに伴って生じていることは明らかであり、終筆部分の払いが左下に向かわず下方に向かう字形は、すでに後藤編著（1951）において横書きに適した新字形として提案されているものである。ただ、ストロークが右上から始まる「あ」「め」の文字では、終筆部分の払いが横方向に向かう字形もしばしば観察される<sup>7)</sup>。この場合、デジタルフォントとの字形の差が特に大きくなっているといえるだろう。

## 1.4. 手書き文字のストローク

字体がストローク（点画）の組み合わせである以上、筆記の指導ではストローク（筆画）が基本となるべきである。日本語学習者にしばしば見られる字形の逸脱として、ひらがなの「さ」の字をバツ印（×）から「\ / →」のように書く書き方が挙げられる<sup>8)</sup>。同様に「き」の字の横画がそれぞれ右から左に（←）払うように書かれることもある（次頁図1）。これらは、違和感の感じられる字形（＝損傷）であってさえ、横画のストロークの方向（あるいは方向と角度）は読み取り（字形からの字体の抽出）を困難にするほどの



図1 ひらがなの「き」の字形

逸脱ではないといえる。一方、ストロークの方向（と角度）では、より決定的な逸脱となりうるケースも想定される。たとえば、カタカナの「ン」と「ソ」とではストロークの方向（右上に向けて撥ねる／左下に向けて払う）、ないしは、ストロークの角度を区別しなければ、誤読を招く蓋然性が高い。

佐藤（2002）は、漢字の字体の構造を〈字体エレメント—字体単位体—字体〉と二重分節されているものと仮定し、カタカナの字体は漢字の字体単位体（字体の一部）に基づいているために、漢字では弁別的でない字形の差が弁別的になることがあると指摘する。たとえば、「ソ」と「ハ」の形は、漢字の字体ではいずれも並列した2ストロークであり弁別的でない（「半」「糸」のように字体中の配置の上下によって実現形が変わるのみである）が、カタカナでは異なる字体である（異なる文字である）という。かかる漢字とカナ文字との字体構成上の異なりは、ストロークの筆記にも影響を及ぼす。

内山（2013）では、左手書字の場合に（漢字の）ストロークの方向を右から左、ないしは、上下を逆方向にする方法を提案している。しかし、カタカナではストロークの方向が変更しがたいケースも考えられることになる。

「ン」と「ソ」の字体は、デジタルフォント（印刷字体）では、ストロークの角度にもデザイン上の差異化が施されており、セリフのない書体（ゴシック体）では字体の弁別要素となっている。しかし、手書き文字を観察すれば、ストロークの方向（右上に向けて撥ねる／左下に向けて払う）のみによって弁別されているのが実態ではないか。

このときに、ストロークの方向を（右手書字・左手書字を通じて）自由にするためには、字体を

変更する方法と標準的な字形を変更する方法とが考えられる。ただ、「ン」と「ソ」の字体の差をより明確にする（例えば、「ン」の「ノ」を「〇」に変えるなど）ことは現実的には難しいであろう。そうであれば、(1)『ン』の（右上に撥ねる）ストロークを「✓」のように起筆を強調した形にし（書き始めは左右どちらでもよい）、『ソ』の打ち込みのない「ノ」（書き始めは上下どちらでもよい）と区別するか、(2)『ン』の（右上に撥ねる）ストロークを「↗」または「↘」のように曲線的にし、『ソ』の直線的ストローク（「↗」「↘」）と区別するかになるだろう。なお、『ン』の点を「—」のように寝かせ、『ソ』の点を「ノ」のように立たせることも考えられるが、「ニ」や「リ」との紛れや誤読が生じる恐れがある。

## 2. 結語

ここまでカナ文字の字形の逸脱について、具体的な事例をとりあげながら考察してきた。

日本語教育の現場（特にアカデミックライティングやビジネスライティングの指導）にあつて気づくことは、上級の日本語学習者でもカナ文字の字形に逸脱が観察されることである。以前から、現場の日本語教師の中では、文字が汚かったり（乱筆）不正確である日本語学習者は文法や語法も不正確な傾向があるという感想を述べる者も少なくない。一方で、〈日本人のように話したい〉と考えて発音の矯正に取り組む学習者に対して、カナ文字を練習しようとする学習者は圧倒的に少ないのも確かである。日本語教育の現場では、文字・表記の学習といえば漢字に時間をとられてしまい、カナ文字は手薄になりがちであるが、ひとつひとつ丁寧に指導する必要があるのではないかと思う。

本稿ではカナ文字の字形の逸脱におけるトランスを探ることを目的のひとつとしたが、個別の事例の検討にとどまり、文字体系にわたっての規準を考えるには至らなかった。この点は、今後の課題としたい。

## 注

- 1) アンガー（2001：29ff.）が指摘するとおり、現代の日本語はカナ文字だけで書くことが

できるが、漢字だけで書くことはできないため、漢字はカナ文字の臨時的の代用だと見做しうる。

- 2) 一般に、個々の文字の外形（実現形）である字形に対し、文字の構造的原型をなすストローク（点画または筆画）の組み合わせを字体と呼ぶ。字体は、通例、特定の字形を用いて表示される。このとき、字体を代表して表示する字形を標準的な字形であると見做すことができる。
- 3) 文字列として見た場合には文脈によって修復できる場合も少なくないと思われるが、ここでは個々の文字について考えている。
- 4) ここでは、読み取りの速度（遅延の有無）で測定できるような〈読みやすさ〉を指す。書きことばでは、表現を練りあげることができ一方、読み書きの速度といった経済性が求められる場合もある。
- 5) キーボード入力、フリック入力、手書き入力、音声入力など入力の方式は問わない。
- 6) 日本語学習者による例を以下に示す。



他にも「し」を2ストロークで書く場合があるが、現在では稀である。

- 7) たとえば、以下のような字形である。



同様の字形は日本人の子供にも見られる（杳名 2010）が、日本語学習者では特に多いように思う。上例はそれぞれ異なる学習者によるもので、母語は左からそれぞれ中国語、韓国語、韓国語、中国語である。

- 8) たとえば、「~~と~~」のような字形である。小林（1980）がアメリカ人学習者の事例を報告しているが、学習者の母語を問わず見られるものである（上例は中国語を母語とする学習者によるもの）。

## 参考文献

- アンガー、マーシャル（2001）『占領下日本の表記改革：忘れられたローマ字による教育実験』奥村陸世訳、三元社。
- 内山和也（2013）「左利き日本語学習者への漢字指導に関する小考：左手書字専用筆順の提案」、『別府大学日本語教育研究』3, pp.23-30, 別府大学日本語教育研究センター。
- （2015）「日本語学習者におけるひらがなのストロークについて」、『2015応用日語學術研討會論文集』育達科技大學應用日語系。
- （2016）「日本語学習者に見るカタカナの字形とストロークについて」、『2016応用日語國際學術研討會論文集』育達科技大學應用日語系。
- 杳名健一郎（2010）「平仮名の字体に関する考察：横書きに適した新しい形について」、『形の科学会誌』25(1), pp.71-72。
- ・杉崎哲子（2013）「書写における姿勢と持ち方による字形の変化」、『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』44, pp.169-175。
- 小竹光夫（2004）「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」、『書写書道教育研究』18, pp.41-50, 全国大学書写書道教育学会。
- 後藤海堂編著（1951）『ペン字横書きの理論と実際』日本学芸書院。
- 小林夫宜子（1980）「入門初期のアメリカ人学生に対するひらがな指導の留意点（報告）」、『日本語と日本語教育』9, pp.69-84, 慶応義塾大学国際センター。
- 佐藤（2002）「字形のゆれ・変化と字体のゆれ・変化の相互関係について：字体・字体単位体のほりあい・収斂に注目して」、『日本語の文字・表記：研究会報告論集』, pp.33-48, 国立国語研究所。
- 杉崎哲子・杳名健一郎（2009）「横書きにおける『平仮名』の速書き指導に関する基礎的研究」、『書写書道教育研究』24, pp.63-72, 全国大学書写書道教育学会。
- 中村栄子（1999）「字形を意識した平仮名・片仮名指導の一案」、『文化外国語専門学校日本

語課程紀要』13, pp.43-80, 文化学園外国語専門学校.

文化審議会国語分科会 (2016) 「常用漢字表の字体・字形に関する指針 (報告)」 [online] [bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/](http://bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/)

[kokugo/hokoku/pdf/jitai\\_jikei\\_shishin.pdf](http://kokugo/hokoku/pdf/jitai_jikei_shishin.pdf).  
「常用漢字表」 [online] [www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo\\_20101130.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf).

(2017年3月13日受付)

